

Servas Japan Tohoku



支部ニュース

No. 86



支部長挨拶

支部長

受け入れ報告

S. M 2

T. N 3

新入会員 3名の紹介 3

H. Sさん

Y. Kさん

Y. Mさん

寄稿 1 栗島サイクリング S. T 4

寄稿 2 被災地 3年半の軌跡 N. T 5



支部長挨拶

雨の多かった夏も過ぎて、秋ですね。

N. T

みなさんお元気ですか？今夏は雨が多かったですね。被害も各地で見られました。お変わりないですか？秋の旅行シーズンになりましたね。

5月の支部総会で久しぶりに会員さんにお会いしました。その際には来年の支部総会は、山形でというお話を決めました。またこの際には、副支部長に新発田市のYTさん、会計にHMさんを選任しました。その後にYTさんからお仕事の都合で退任の申し出が有り、6月の「新潟支部会」で副支部長に前支部長のSTさんからなってもらいました。ご承認をお願いします。

新潟支部会とは、今回の支部総会の前後から2ヶ月に一回の新潟支部会開いています。今では、新潟の会員3人（私、ST副支部長、会計のMさん）で集まって支部と会員の話話を話合っています。

ところで、今年は、東北支部の新入会員が3人増えました。山形市のYMさん、仙台市のHSさん、福島市のYKさんです。次の支部総会でお会いできるのを楽しみにしています。

支部総会の持ち方も各県周りにするか、どこかを開催地にするか、時期は5月以外もどうかという意見をアンケートで聞きたいと思います。支部ニュースの時か、12月のホスト受け入れ状況確認の際などに行いたいと思います。

新潟支部会では、10月に副支部長のSTさんの勤務先のNUで、サーバスのPR会を計画しています。

受け入れ報告

7月26-27日 K バングラデシュ 医師 43歳

S・M

サーバスとは国籍や宗教、文化、習慣を超えて、お互いに努力し理解し合う組織です。しかしながら「言うは易く行うは難し」で世界各地で次々と紛争が起こり、日本人にとっても心穏やかに毎日を過ごすことが厳しい状況になってきました。

そんな世界情勢の中、私は今回初めてバングラデシュの女性を受け入れました。

Kさんは毎年東北大学に研修に来ていて3年前に知り合いました。ご主人も東北大・医学部に留学したこともあり、仙台を第二の故郷として想っています。

7月26日は蒸し暑いでしたが、Kさんは身体全身を美しい民族衣装で包み我が家に到着しました。この日はイスラム教徒の彼女にとって大切なラマダンの最終日でした。年々来日するイスラム教徒も増えているのでラマダン(1ヶ月間の断食月)の言葉も日本社会にも珍しくなくなりましたが、私にとって直接接するのは初めての体験でした。

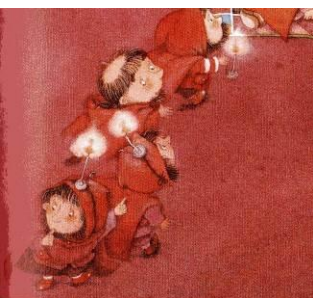
ラマダンの一ヶ月間、日の出前から日没まで飲食を断ち、虚言、悪口、怒りを避ける決まりがあります。人にもよるのですがKさんはラマダンの最終日を毅然としてお茶も水も飲み物は全く口にせず、日没の6:55分を待ちました。熱中症が騒がれていた時期でしたが私も彼女と共に飲食を口にしないで過ごしてみました。今でも私はその時の小さな我慢ができたこと強く思い出として残っています。イスラム教徒の彼女が仙台に滞在中、日本人の家庭に宿泊したのは今回が初めてだったことが分かりました。

一日5回の祈りの時間もあり異教徒の家庭に泊まることを避けているのかもしれませんが、彼女は午後3:15分になると、その日の何回目かの祈りをしました。祈りの前に3回も顔、手などをきれいに洗い清めるようで印象に残りました。最貧国の一つと云われるバングラデシュにあって、医師として、教授として、妻として、母として生きるKさん。イスラム教徒がともすると誤解されてしまう昨今ですが、来年もまた彼女との再会を願っています

首都ダッカにサーバス会員は3名だけの登録です。彼女はサーバスの考え方に賛同してくれていますが残念ながらまだ会員になっていません。近い将来会員になってくれることを信じて待っている私です。



ダッカ・市民の足、リキ車



ケルン州の妖精たち

7月12-14日 Rさん ドイツ ジャーナリスト 49歳

S・M

Rさんからサーバス東北支部会員の多くにメールが入ったのは来日の2ヶ月前でした。メールを受け取った会員の皆さまのほとんどが受け入れOKを返信して待っていてくださったことでしょうか。今回の彼の来日の目的がジャーナリストとして福島の大震災取材することでしたから、少しでも役に立てたらという東北支部会員の優しい想いがあったことと思います。福島のNTさんの報告にも書かれています。Rさんは英語が余り上手でないためにカナダ人の通訳が間に入ったこと、原発事故現場の調査日程の度々の変更があったことなので滞在は仙台の私の所だけになってしまいました。忙しい滞在中、7/14日の朝早く成田空港に向けて仙台を後にしました。

私にとって、神奈川・藤沢市に住んでいた時を含めてサーバス歴も既に35年になります。近年受け入れる度に感じるのは双方でゆったりした時間を過ごす余裕が無くなってきているということです。受け入れるホスト側の忙しい日常と、滞在するトラベラー側の過密なスケジュールで二泊三日があつという間に終わってしまいます。

この状況は日本だけでなく、世界の多くの国が共通する問題を抱えているのではないのでしょうか。一例として今年の6月から3ヶ月間、私の友人は長年憧れていた南アメリカの国々に旅をしました。彼女

の報告によると受け入れてくれたサーバス会員は残念ながら非常に少なかったそうです。それでも受け入れてくれた会員はラテンの国の陽気な雰囲気を堪能させてくれたと言っていました。.....。自宅にトラベラーを受け入れて生きた異文化交流ができるのがサーバスの一番の利点で、それはとても素晴らしいことなのであります。

Rさんの受け入れ報告に戻ります。彼はドイツのケルン州に住む物静かな心優しい男性でした。福島での取材に関しては話すことはありませんでした。お土産はケルン州の人々に愛されている妖精の出る可愛らしい絵本で、ヨーロッパの国に妖精のお話は似合っていると感じました。彼は町から遠い森の中に住んでいるため、サーバスに入会して10年がたつのに一度もトラベラーの受け入れをしたことがないのです。彼が退会せず継続してくださったお陰で私たちは今回出会うことができました。サーバス・トラベラーとしての体験も今回の日本が初めてで滞在中やや緊張気味でした。

私たちが忙しいこともあって宮城県石巻市の被災地を訪問するに当たって、友人の息子さんたち若者をお願いしていろいろな所に連れて行ってもらいました。サーバスを若者たちに少しでも知ってもらえたと願ってのことでもありました。

7月5日 Rさん Rさん ドイツ ジャーナリスト 49歳

NT

英語に不安のあるRさんとの連絡に度々日本語の話せるカナダ人通訳が入ったことで少し不愉快な気持ちになった。最初に決まっていた彼の7/5-7/6日の滞在希望はキャンセルになり、7/9日はどうかと言われOKを出すと、またキャンセルとなり二転三転した。7/5日私が所属する「吹き矢クラブ」に参加するなど、結局私はDay Hostをすることになった。

① 吹き矢体験

私たちは地元の公民館に出かけた。Rさんは「日本スポーツ吹き矢協会」の支部長から実際に「矢」を吹くための型について指導を受ける。

彼はすぐに5本の矢を吹いてみる。結果、見事に2本が真ん中に命中。他3本は周辺に当たるも初心者としては高得点となり、仲間の拍手喝采を受ける。コメントをもとめられると、一言「瞑想の気分」と言っていた。

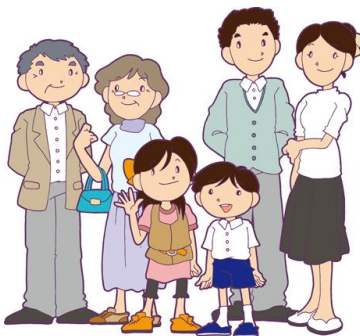
② 放射線モニタリングセンターの見学

公民館の1階にある放射線モニタリングセンター案内をした。ジャーナリストとしてRさんには良い機会と思った。機材や室内の撮影は許されなかったが係官が下記のように説明してくれた。

- 1) 食物では主に自宅の庭等で栽培したものを中心に検査している。
- 2) 持ち込んだ食物の重さは700gが可能で、細かく切り刻む必要がない。
- 3) 器材は最新のもので5分間で計測できる。
- 4) 爆発時に放出された原子核の種類は主にセシウム134と137の合計とする。合計は年間1ミリシーベルト以内になる。

それから私の自宅に寄り、除染した庭の様子を観察してもらった。Rさんの腰には被爆用の計量器がつけられていた。そして私は彼を福島駅近くのホテルまで送った。以上

新入会員3名の紹介



○ はじめまして。8月に入会させていただきましたHSです。

以前から、何らかの形で国際交流できたらなあと思い描いて、現在64歳になってしまいました。たまたま、今回ご縁があり、思い立ったら吉日で入会を決めました。

近所に、娘、息子家族が住んでおり、孫たちの面倒をみななければならない機会も多く、自分だけに使える時間も限られるのですが、残り少ない人生に、自分の夢を叶えられたらと思います。

また、自分の生き方が、孫たちの成長に参考になればいいなあとも思っています。

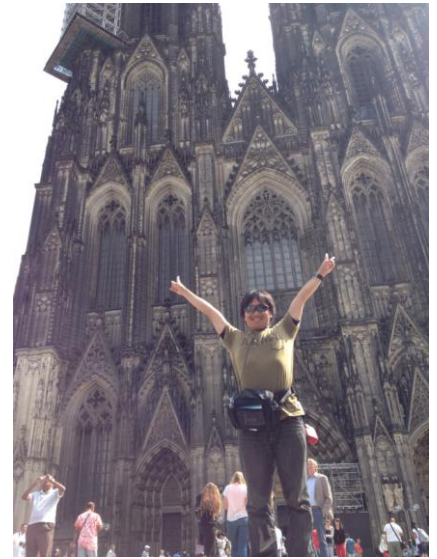
5年程前より、日本語ボランティアとして、色々な国の留学生の奥様やALTの方に日本語を教えておりますが、これは英語が出来なくてもOKなのです。



ケルン州の妖精

私は英会話がほとんどできなくて、現在勉強中ですが、増々頑張らねばならなくなりました。皆様のお力をお借りしながらやっていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

- 初めまして!!この度日本 SERVAS に入会しました YK です。
 今年の夏にヨーロッパへ行った際、ドイツの SERVAS 会員の方に SERVAS について教えて頂き、大変興味を持ったので思いきって入会してみました。簡単に箇条書きで自己紹介します。
 ・水泳部、ゴルフ部に所属
 ・趣味.. 映画鑑賞、旅行、英会話
 これから積極的に活動に参加していきますので宜しくお願いします。



- YMさんのプロフィール
 SMさんからの紹介文
 山形市在住の女性です。ギリシャ ハンガリー オーストリア オーストラリア 米国 中国 シンガポール等いろいろな国を訪問してきました。趣味は水泳 ヨガ と楽器フルートを吹くことです。

寄稿 1

粟島サイクリング

S T

9月12日、天気も良かったので粟島に行ってきた。粟島は村上市岩船港から35km、日本海に浮かぶ周囲23kmの小さな島である。私の生まれ育った村上からは小さい頃からいつも見ていた島であるが、この年まで島を訪れようと思ったことはなかった。佐渡ならば歴史があるから見るべきものが多いところがある。ところが粟島には何も無い。ならば自転車で島を一周しようということになり、家内も同行することになった。

新潟の自宅から岩船港まで車で1時間位。9時半の高速船で出発、10時半頃、約50分で粟島に到着。船の時は約40キロであった。平日なので乗客は少ない。船を下りる際思わぬ人と会った。彼は前の勤務先の同僚で、今は市内の私立大学の学長をしている。何の用事ですか、と聞いたら学生のインストラクターの講習会ということであった。

船は内浦という港に着いたのであるが、ここは昭和39年(1964年)の新潟地震のときは海であった。地震で島が3メートル位隆起したのである。20メートル位が陸地になっており、村役場場所も元は海である。島に到着後、私はマウンテンバイクに乗り、島一周に出かけることにした。港には土産物売り場もない。家内は私が戻るまで港付近を散策するという。船に乗るとき、切符を切っていた若い社員が、自分はマウンテンバイクで島一周したが1時間かかった、かなりきついですよ、と言っていた。私は安易に1時間半位で一周できると思い、出発した。佐渡は島一周の道路がほぼ海岸に沿って走っている。天気も良いし、海を見ながら走ろうと思ったが、粟島の道路は山を縫って走っている。海どころでない。港から出発したらいきなり800メートルのうねった坂道である。ペダルをこぐところではない。自転車を引っ張り、坂道をしばらく歩いて行った。島の東側ではまだセミが鳴いている。800メートルの坂道を上った後は島



崎あたりまで比較的平坦な道路が続くが、なだらかな坂道もあった。民家はなく、車もほとんど走らない。人影は全くない。鳥崎から西側に向けて走る。牧平あたりでもなだらかな坂道がある。ギアをローにして走るが、向かい風のため少しきつい。島の西海岸は奇岩が立ち並ぶ断崖になっている。標高が高いので、景観は良い。ただ遊泳は禁止である。奇岩の断崖を見て思ったのはどこかの国の不審船が近づけば簡単に人が上陸できるということである。佐渡ではそのようなことが実際に起こった。日中はたまたま車も通るが夜はまったく人気がないところである。丸山付近でまた長く続く坂道に出会う。坂道に加え、小雨が降り始めた。雨に坂道はサイクリストにとっては最悪である。雨はしばらくして止み、また青空が見え始めた。東側ではセミが鳴いていたが、西側ではセミも聞かない。坂道を下り、釜谷地区を目指してペダルを踏む。粟島では港周辺の内浦地区と釜谷地区だけに人が住んでいる。島全体の人口は400人位である。釜谷地区には漁船が多く見られた。漁で生計を立てている人が多いのであろう。夏には海水浴客も多いのであろうが今は誰もいない。土産物売り場らしき所で一人のお年寄りが座り、海を眺めていた。釜谷地区を過ぎたら500メートルの細い坂道があった。車一台がやっと通れるくらいの狭い坂道である。坂道を登り切り、一気に全速力で坂道を下る。海も見え、静かな光景である。釜谷地区に入る前に内浦地区に続く道路があったのだが、そこをなんと「品川」ナンバーの車が走っていた。孤島粟島に「品川」ナンバーの車、私はその奇妙な組み合わせにしばし不思議な思いにかられた。釜谷から内浦まで8キロ位であったろうか。あと少しである。西海岸に出たらまたセミが鳴いていた。内浦に近づくとあちこちにキャンプ場があった。夏には海水浴客でごったがえすのであろう。確かに粟島は釣りやキャンプや海水浴目当ての人には良いところである。海水はきれいだし、魚もつれるだろう。私の従兄弟は釣り好きで、何回か粟島に来ていたが、それでも釣りをしたあとは民宿で酒を飲んで寝るだけだと言っていた。何もないのである。家内とは12時半に切符売り場で会うことになっていたが、着いたのは12時40分過ぎであった。23キロのサイクリングに2時間もかかった。それだけ道路が起伏に富んでいたということであろう。家内に何をしていた？と聞いたら港付近をぶらぶらするだけだったと言う。土産物店で海藻を少し買っていた。昼食には名物のわっぱ飯を食べようと思ったが、港近くの食堂で海鮮丼を食べた。何もすることがないので、1時半の高速船で島を離れた。

粟島は天気の良いときには新潟市からも見ることができる。村上の海岸からはすぐ目の前に島がある。新潟県には佐渡と粟島の二島があるが、これで二島を走ったことになる。佐渡を走ったときのような心地よい達成感、疲労感はなかったが、これまで行ったことのなかった土地に行ってきたということだけは言える。真夏だったら違った印象を受けたであろう粟島訪問であった。

寄稿 2

被災地3年半の軌跡

NT (Peace Secretary)

被災地は、3年半が過ぎて訪れる人の数が増えてきています。ただ、宿泊施設が少ないために多くの訪問者をすぐに受け入れることには至っておりません。見に来てお金を落として地域経済の一助になればいいのですが。

そこで必要なのが当時の体験を話す人・・・なぜか「語り部・・・かたりべ」さんの活躍になるのですが、この呼び名、なんとなくしっくりしない。「被災体験を話してくれる人」でいいのに、どういうわけか専門員になってしまう。さしずめ、私も「語り部」になってしまうのか。いやいやその名称はなんとしても嫌だ。

気仙沼は地面が綺麗になってきました。まだ二千人以上の行方不明者があるとは思えないほどに。当時被災者の多くを受け入れてきた海岸沿いのホテルに行ってみた。波は海から15mの位置にある露天風呂まで来たという。その風呂に入ってみた。おだやかで静かな海が一瞬にして変貌したとはなかなか思えない。流された「カキいかだ」も広島や九州の同業者からの協力で復活して、風景になじんでいる。

南三陸にかけての国道沿いは、塩水に浸かった木々の多くが枯れて切り倒された木が積み重なって処理を待っている。そのせいか小高い丘の低いところは綺麗に伐採されている。道路の整備と共に目につくのが背の高い防潮堤工事の盛り土。完成すると陸から海が見えなくなる。そのための土墨があちこちにある。土を運ぶために新たに道路ができる。

防潮堤の多くの発案は住民ではなく、行政だ。特に国からの補助金交付の期限が切れる前に工事の設計図を書かなければならず、被災した日から復興の名目で進められてきた。その設計が国道を修復したり鉄道をどこに通すかということの基になるから、その高さが決まらない限り道路や鉄道のインフラの復旧も

できない。こうして2年から3年の間、復旧・復興が大切だと言われながら先送りされてきた。国はそんな高い防潮堤は必要ないのではないか・・・と疑問を投げかけるが、被災した年の政府の話が県の方針を作ってしまったから、もう後には戻れない。何しろ被災地の行政も市民も巻き込んで予算を使うための流れに乗ってしまったからだ。石巻などは海辺に近い広大な土地の処遇を巡って市議会も紛糾し、これまで草は伸び放題、震災遺構指定の思惑はありながら整備もせず、廃墟となった学校を足場と目隠し布で覆ってきた。多くの命が亡くなったその地域では幼稚園の生徒が乗ったまま運転手は逃げて火災の中に放置されている。家のほとんどが行政の手で撤去されたが、基礎のコンクリートがあちこちに残っていたが、ようやく大がかりな整地が始まる。

集団移転もいよいよ一～二年後には建築が始まり一斉に転居する。今はまだ数家族が引っ越しては空き家が増えてきている状況。しかし、集団移転を考えた当初から3年も過ぎれば、計画から抜ける家族も生じてくる。仙台の南にある岩沼地区では、地域の人々のコミュニティをそのまま仮設住宅に移し、お互いの絆を保って生活してきた。そのため集団移転にもその絆を生かせる工夫をしてきた。

しかし被災地の多くの地域では仮設住宅に入居するときに、無用なトラブルを避けるために公募抽選を行ってきた。それで失われたのが生活の絆。むしろ絆を最初から無視して合理性を選んだといってもいい。

これまで支援してきた気仙沼の本吉地域では、地域住民の「絆」を中心に集団移転を進めている。2年後の建設を見据えて移転計画を立てている。バラバラになった地域の「絆」を、子供たちのためにまとめようと大人たちが集まっている。

私は、2年後に集団移転する街には街路樹、庭には樹木や草花、それらを植える道具をと考えている。植物のほかに肥料も必要だろう。地域に植えるためには多くのボランティアも必要だ。夢は膨らんで、共に作業するためや交流のためのセミナーハウスもあるといいが、そううまくいかない。それでも送っていた水仙の球根は7千個くらいには増えた。水仙ロードへの植栽は来年を考えている。